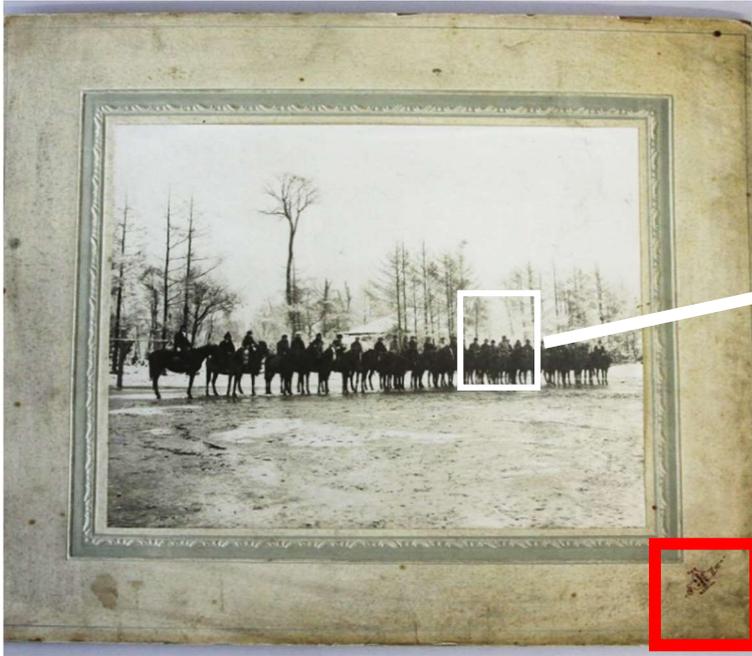


「美唄乗馬會」の謎と大正・昭和初期の馬たち

謎の写真に見入る

ここに一枚のモノクロ写真がある。馬に乗った男たちが横一列に整列している。数えてみると、全部で29人と29頭いるようだ。古い写真と思われるが、撮影時期や撮影場所、被写体となっている人たちの詳細など、一切わからない。ただ、しっかりした厚紙の台紙には、写真館のマーク・ロゴが印字してあり、そこには北海道の略図の中に「空知郡 美唄 大島写真館」と縦に記され、その下に「B. OSHIMA,」(Oは上に一)とローマ字で表記されている。背景には、まばらな木立と中央付近に平屋と思われる建物の屋根の一部が写っている。残雪と思われるものも見える。手前の平らな地面は、ぬかるんでいるようで、ところどころに水たまりのようなものが見える。馬にまたがっている人々は、厚手の上着などを着て、全員帽子をかぶっているが、帽子のかたちは様々だ。ニット帽や山高帽、鳥打帽など、思い思いの帽子で、マフラーを巻いている人もいて、服装は統一されていない。よく見ると列の中央からやや奥寄りの一騎がリーダー格のように少し前に出ている。季節は、雪解け時期、まだ寒気が残る春先か。





台紙 32.1mm×38.7mm 写真 20.5mm×26.5mm

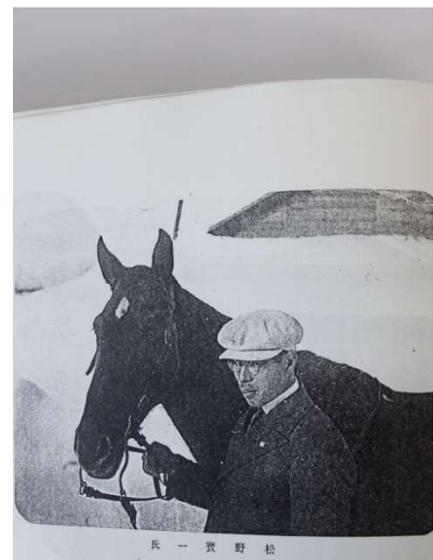


1 騎が前に出ている？



「大島寫真館」のマーク・ロゴ

さて、これは何の写真なのか。写真は、美唄市役所の行政資料室で見つかった。この写真に似たものがあつた。昭和4年（1929年）発行の今上陛下御成婚記念写真集『菊の薫』所収の「美唄乗馬會々員」とキャプションが入った写真だ。同じように、馬に乗った人々が横一列に整列しているが、こちらは街中の建物の前で撮影されている。同じページに「美唄 乗馬會」と記された旗を挟んで二人の人物が写った写真もあり、「會長 櫻井肖吾氏」と記されている。「肖」の字が違うが「櫻井省吾氏」は、明治30年（1897年）美唄生まれ、札幌第一中学校、早稲田大学法学部を卒業し、町議会議員を経て、初代美唄市長となった人である。父良三氏は、第二代美唄町長。



左上「美唄乗馬會々員」

左下「會長 櫻井肖吾氏」

右上「松野寶一氏」

いずれも写真集『菊の薫』から。

美唄乗馬會の副會長は、獣医師、松野寶一氏で、この人は写真集『菊の薫』別ページに馬の手綱を取った姿が掲載されている。そうすると櫻井省吾氏と並んで写っているのは、副會長の松野寶一氏か。

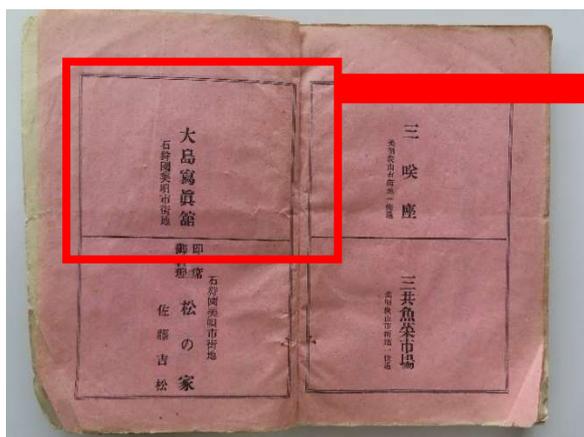
いつ撮ったのか

問題の写真に戻ると、大島写真館については、『美唄市百年史』に次のような記述がある¹。

大正元年、大島文市が裏通りに本格的な写真館を開業し、(中略)裏通り(現在の末広通り)から駅前にかけて、石炭販売関係の事業所や倉庫、運送店などが並ぶ。国道(大通)、裏通り、晩生内通りにかけて新しい商店の進出や改装もめだつようになった。

大島文市つまり「B. OSHIMA」である。また、『沼貝村史』(大正4年発行)には、巻末広告の中に「大島寫眞館 石狩國美唄市街」とあり、昭和4年発行の市街地図「美唄市街及附近之圖」(札幌通交社発行)には「大島寫眞館」が末広通り(現在東1条通)に記されている。しかし、昭和9年発行の「美唄市街案内圖」(発行者不明)では、その場所は「中村寫眞館」となっており、店名が変わっている。したがって、「大島寫眞館」は、少なくとも、大正元年(1912年)から昭和4年(1929年)までの間、写真館を営んでいたと思われる。そうすると、問題の写真は、この時期の撮影ではないかと推定される。

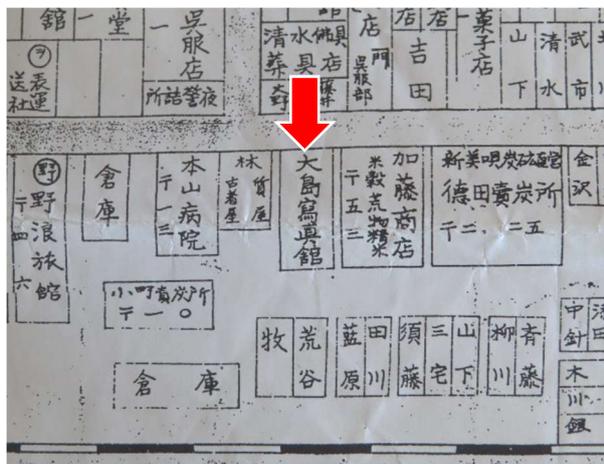
なお、大島文市は、『美唄市百年史』で、その後の名鑑録のはしりとなる大正13年発行『沼貝村記念寫眞帖』(発行者、砂川町、高橋従之、山本栄蔵)の撮影者として紹介されている²。



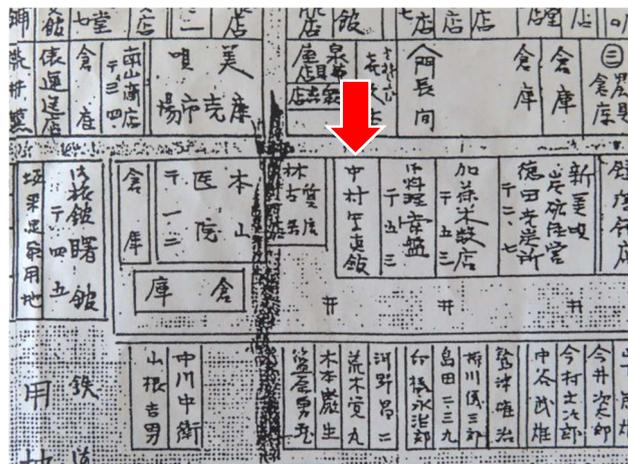
「沼貝村史」巻末広告



大島寫眞館の広告



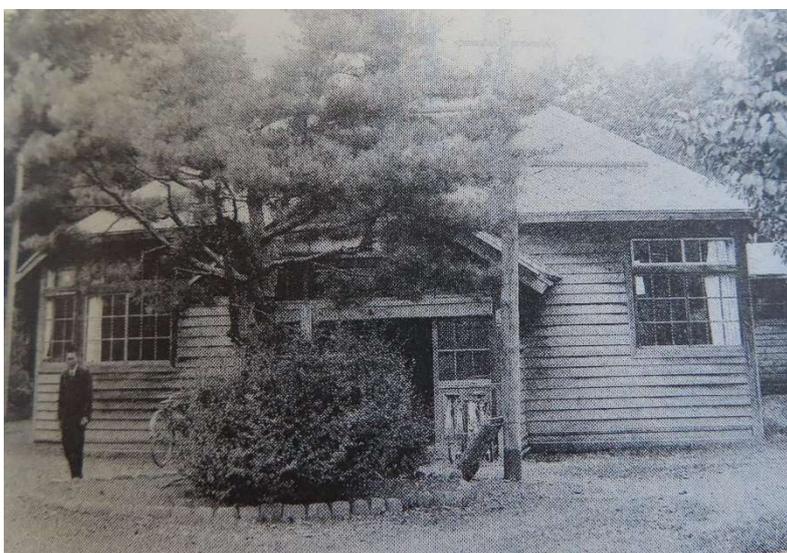
昭和4年発行の「美唄市街及附近之圖」



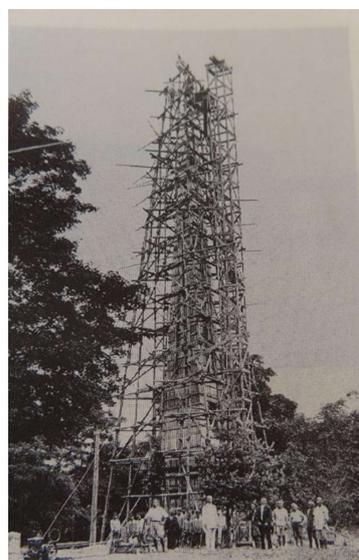
昭和9年発行の「美唄市街案内圖」

どこで撮ったのか

撮影場所については、長く郷土史を研究されている白戸仁康氏によると、屋根の一部が見える建物は、美唄町役場、広い場所は、役場の隣にあった美唄小学校（当時、沼貝尋常高等小学校）のグラウンドではないかのご指摘をいただいた。後年、沼貝町が美唄町へと、まちの名称が変わった際に、「沼貝」の名を残すため、「沼貝開拓記念碑」を建立すべきという桜井良三町長の提案により、碑は役場に隣接する空知神社境内の南側に昭和4年（1929年）7月1日着工され、8月30日竣工されている。白戸氏は、沼貝開拓記念碑がすでに着工あるいは完成していれば、背景に入れて撮影し、あるいは意図しなくとも高さ21.8mの塔の一部は写り込むのではないかと指摘をされた。そうすると、撮影時期は、沼貝開拓記念碑の着工前、昭和4年6月30日以前となるのか。明治23年（1890年）に誕生した沼貝村は、大正14年（1925年）に町制施行され沼貝町に、大正15年（1926年）に美唄町に改称され、昭和25年（1950年）の市制施行で、美唄市となる。



美唄町役場写真（昭和3年頃）『美唄市百年史』より



沼貝開拓記念碑上棟式（昭和4年）
『美唄市百年史』より

人と馬の謎

では、写真の29人と29頭の馬は、いかなる人と馬たちであったのか。「美唄乗馬會」という名称は、乗馬を愛好する人たちの集まりと思われるものだが、大正から昭和初期、北海道にいる馬といえば、農耕馬や貨物等を運ぶ荷馬車や馬そり用の馬などが思い浮かぶ。前出『美唄市百年史』の記述では、このころ駅前にかけて、石炭販売関係の事業所や倉庫、運送店などが並んでいたという。このあたりに馬がいても不思議はない。また、屯田唯一の騎兵隊が置かれた美唄であれば、軍馬もいたと思われるが、屯田兵は明治34年（1901年）に全員、後備役になり、解散している。『美唄の屯田兵』（昭和54年発行）には、次のような記述がある。

馬は明治24年には南部産の牝馬が渡されましたが、25年、26年は道産馬で、アイヌが何十頭という馬の集団を追ってきて埒（らち）の中で乗り回わして少し人を乗せるようになると「よし!!」と喋ってつぎからつぎと兵に渡したものです。兵は兵で馬に触ったことのない者も少なくないので、馬に乗るまでの苦心というものは、他の屯田の人達の知らない苦勞がありました³。

軍馬としての調教も含めて、騎兵隊員は軍事教練に励んでいたのだろうか。美唄兵村に配置された騎兵隊は、特科隊として明治24年（1891年）から27年（1894年）の4年間に160戸が入植し、連日の激しい訓練の主体は乗馬訓練だった。騎兵隊本部には、蹄鉄工場、馬匹

(ばひつ) 治療所、馬繋所が設けられ、幹部は屯田家族に馬匹の飼育と訓練方法を指導したという。なお、軍馬は、農耕に使役することを認められていた⁴。

空知神社に関しては、現在の国道 12 号に面して建っていた美唄神社を明治 27 年、現在地に移転、新社殿を造営し、明治 34 年に空知神社と改称している。

『美唄市史』には、荷馬車運送に関して次のような記述がある⁵。

大正時代 開拓の進展に伴い耕地も増加し、したがって農産物の運搬もしだいに忙しくなった。また、農閑期には農民が副業に運搬を始めるようになった。

そしてこれら馬車をもって運搬を行う者を一般に「馬車追い」と呼んでいた。馬車追いの一番忙しい時期は、農産物の出荷期であるが、大正 2 年、飯田美唄炭鉱⁶が開鉱したとき、まだ美唄鉄道が開通していなかったため、開鉱に必要な物資、食糧の運送は、この馬車追いの独壇場であった。

昭和期 (戦前) 昭和にはいと物資の流通はますます激しくなってきた。このころになると、美唄にも貨物自動車が出現したが悪路のため、まだ営業として利用できるほどの発展をみないままに、ガソリン統制でその台数も伸びなかった。また、同じころから馬匹の改良が進み、ペルシロン系⁷のひき馬も現われ、馬搬も大型化していった。さらに馬搬を大きく発展させたものに、保道車の出現がある。

保道車は普通の荷馬車より雑穀を 10 俵から 15 俵も多く積んでも、なお軽いので評判はよかったが、値段も高かった。そのため、昭和 15 年、運搬専門の馬車追いが使用した台数は 23 台にすぎなかった。(中略)

客馬車営業 美唄の客馬車は、水谷重信によって大正 10 年ころから営業が行なわれた。はじめ冬期間、馬そりだけの営業であったが、後に夏期間も客馬車を運行した。客馬車(そり)の運行は、三井美唄へ定期便が日に 8 往復、それに貸切りも随時に運行した。

昭和の初期に、三井美唄が発展すると乗客も多くなり、ことにバスの運行が開始されても、冬期間はほとんど運休状態であったため、客の利用が多く最盛期には馬そり 3 台をフルに使用してもさばききれず、馬も御者も休憩する暇もないほどであった。特に戦時中は美唄にハイヤーがなかったため文字どおり住民の足として、冠婚葬祭等の利用が非常に多かった。この水谷客馬車店は、戦後も営業を続け、昭和 29 年に廃業した。



保道車

昭和 8 年(1933 年)、札幌に転居した斜里の鍛冶屋菊池某が考案したと伝えられる。自動車の古タイヤを利用し、振動がゴムタイヤに吸収されるため、馬の疲労が少なく、道路を破損しない。「タイヤ馬車」とも呼ばれた。美唄には、保道車修理の店もあった。写真の保道車は三菱美唄炭鉱に 2 台しかなかったうちの 1 台(年代不明。美唄市行政資料室所蔵)。

農耕馬といっても運搬用にも使われ、軍馬といっても農耕にも使われ、泥炭地では客土の運搬に、炭鉱では坑内外での動力源として、馬たちは北海道における経済活動や人々の暮らしを広く支えていた。屯田兵解散後、美唄に乗馬に向けた馬がどの程度いたのか不明だが、馬の数は確実に増えていき、同時に改良も進められていく。

明治初期、開拓使は、プラウ、ハローなど畜力農具を曳かせる農耕馬や車を引くのに適した馬をつくるため外国種の馬や南部馬を種馬として購入し、小型の北海道産馬(どさんこ)⁸の馬匹改良を進めた。また、道産馬の繁殖を抑えるため、牡馬の去勢を行っている⁹。

美唄での馬の繁殖や飼育の状況はどうだったのか。『美唄市史』では、明治後期に道産馬を農耕馬として個人で導入する者が増えたことに加えて、次のように記述している¹⁰。

なかでも、美培農場は明治30年ころから牧場経営に着手し、最初馬3頭を土地の者から借りていたが、後、真駒内牧場と日高の牧場¹¹から馬4頭を借りて経営し、14頭に増殖した。また、同じ30年ころ、中村農場で道産馬の共同飼育を始め、畑の整地に使役した。(中村15頭、元村4頭)翌31年の大水害で10数頭の馬ができ死したが、その後も道産馬の生産が盛んになっていった。

飼育数については、『美唄市百年史』に推移がまとめられている。

馬飼育数の推移

年次	外国種	雑種他	計	農家戸数
明治32	0	403	403	(2,000)
39	0	365	365	1,840
42	2	1,170	1,172	1,923
44	1	1,092	1,093	1,921
大正7	6	1,491	1,497	2,152
9	3	1,952	1,955	2,199
12	7	1,500	1,507	1,672

『美唄市百年史』491頁

美唄では、明治期には北海道産馬の生産が急速に進められたが、大正期になると外国種(洋種)が種牡馬として馬匹改良¹²に使われていった状況が見て取れる。

昭和初期の状況について、『美唄市百年史』では次のように記述している¹³。

昭和初期美唄の農家は農耕馬を各個人で飼育し、使役していたので馬車や馬そりは、必要に応じていつでも使用していた。これらは農業用資材、収穫物の運搬や自家用交通手段として利用されてきた。昭和元年の美唄町事務報告書によると、この年の課税対象交通手段には、常用馬車1台、荷積み牛馬車708台、荷積み車110台、馬そり1280台、自動車1台、自転車270台の記録がある。

このようなことから、問題の写真に写っている馬に関しては、馬種などは判別できないが、乗馬専用か、農耕馬や他の用務馬との兼用か、個人所有か、運送会社などの社有か、など疑問が次々と湧き出す。また、この時期、草競馬¹⁴やばん馬が盛んに行われるようになっていく。

「美唄乗馬會」のメンバーも、会長が櫻井省吾、副会長が獣医師の松野寶一、この2氏以外は不明である。どんな人たちだったのか。屯田騎兵隊との関連はあるのか(櫻井省吾氏の父、良三氏は屯田騎兵隊出身)。職業や年齢、経歴、馬とのかかわりは、馬列から少し前に出ているのは誰か。など疑問は尽きない。白戸氏は、前出『菊の薫』に掲載されている「美唄乗馬會」の写真は、発行前年の昭和3年撮影、撮影場所は、美唄ではなく岩見沢か札幌ではないかと推測する。つまり、美唄から遠乗りした先で撮影したということになるのか。この「美唄乗馬會」がいつ創設され、どのような活動を行い、いつまで存続していたのか、記録した資料は見つかっていない。そして、この写真を撮影した動機、契機といったものは、どのようなものだったのか。遠乗りをするために集合して、その記念として撮影したのか(出発前あるいは帰着後など)、特別な行事への参加や創立周年記念など、別の理由があったのか、これも不明である。謎の多い写真であるがゆえに、見る者をベールに包まれた歴史の深奥へと誘う。

美唄乗馬會会長の櫻井省吾氏は、明治30年(1897年)6月22日生まれなので、昭和4年時点では、31~32歳。町長に就いていたのは、昭和22年(1947年)4月5日から25年(1950

年) 3月31日までの1期3年弱。市制施行後、昭和25年4月1日から31年(1956年)8月31日までの2期6年5月、市長を務めた。

以上、推測、推定の範囲を超えるものは一つないが、この謎の写真について、あえて整理すると次のようになる。

撮影時期 大正元年～昭和4年6月30日以前

～大島写真館の営業活動が確認できる時期で、沼貝開拓記念碑の着工前。

季節は、3月下旬から4月上旬の雪解け時期。雪が降り始めた初冬とも考えられるが、すっかり葉を落とした木立の様子からすると、厳冬期を経てこれから春を迎える頃と見るのが妥当と思われる。

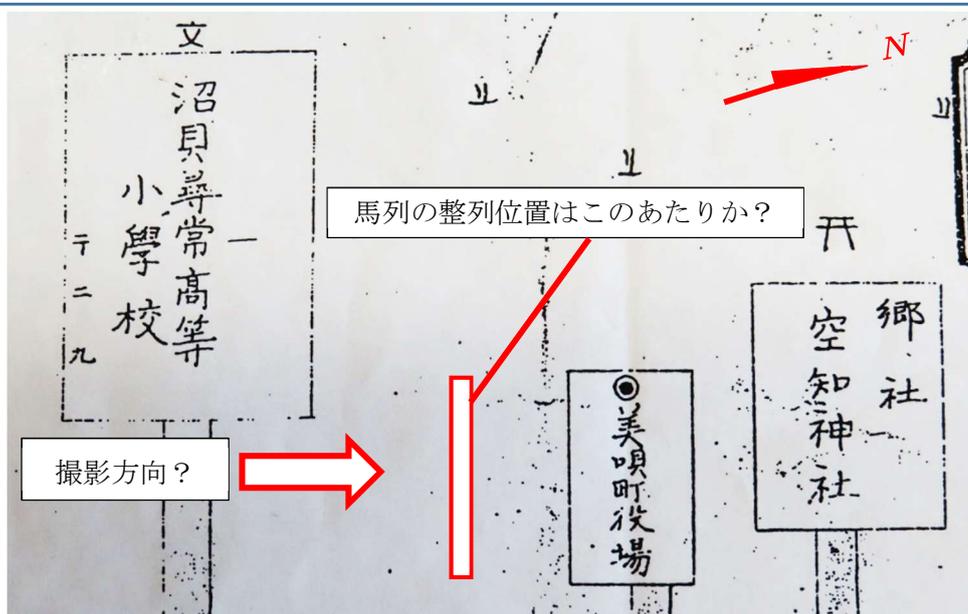
撮影場所 沼貝尋常高等小学校グラウンド

～背景に美唄町役場庁舎の屋根の一部が写り込む。

撮影の向きは、おおむね南から北方向。馬首は、南西方向。

被写体 美唄乗馬會の会員とその愛馬と推測されるが、確証はない。

撮影動機 雪が解けて乗馬の季節を迎え、記念となる活動を行ったか、あるいは、これから行うので、騎乗整然とした姿を記念写真に残すため、繁華街に開業して20年を超え経験と実績豊富な写真館に依頼した。



昭和4年発行の「美唄市街及附近之圖」から撮影場所を考える



撮影場所と推定されるあたりは現在、道庁住宅の駐車場。左奥に沼貝開拓記念碑、さらに左に空知神社。

美唄市総務部総務課行政資料室 伊藤 敦史

(令和5年2月17日)

注

- 1 『美唄市百年史』平成3年発行。第2章第5節 442頁。
- 2 『美唄市百年史』第2章第9節 632頁。右写真は、大島文市の肖像。
- 3 『美唄町史』“開拓苦心座談会”中の常盤房次氏談から引用して掲載されている。「埒」は、馬場の周囲の柵。
- 4 『改定増補 歴史写真集 屯田兵』（平成元年、北海道屯田倶楽部発行）112頁。
『美唄市百年史』では、明治24年末の兵村馬匹数は、騎兵隊44頭と砲兵隊などに若干入ったのを加えて50頭強で、騎兵隊分44頭のうち33頭は北海道産馬、残りは南部産馬であったとしている。第2章第6節 490～491頁。
- 5 『美唄市史』昭和45年発行。569頁～570頁。
- 6 飯田美唄炭鉱は、明治44年（1911年）東京の弁護士、飯田延太郎が黒柳金二郎から買い取り、大正2年（1913年）開坑。大正4年（1915年）、三菱合資会社を買収される。
- 7 ペルシュロン（Percheron） フランス・ノルマンディー原産。毛色は青毛（黒色）、芦毛（歳とともに白くなり最終的に純白になる。）などが多く、体型はサラブレッドに比べ足が短く、胴が太い。体高（肩までの高さ）は160 - 170センチメートルで、大きなものでは2メートルを超える。体重は1トンにもなり、サラブレッドの倍ほどにもなる。性格はおとなしいが、非常に力が強く、馬車馬、ばん馬などに使われる。日本では主に開拓期以降の北海道で導入され、軍用馬生産のために在来馬の改良に用いられた。
なお、ばん馬は、明治時代、北海道の農民が祭りでの馬の力比べの競争をしたのがきっかけで、馬の価値や力を試すための競争として始まり、2頭の馬を互いに引っ張らせ、競い合わせていた。それに過重をかけて引かせる方法は、明治の終わりごろから始まり、農耕馬の祭典として定着していったのがばん馬競馬の始まりとされる。
- 8 江戸時代、ニシン漁場で働いた南部馬が厳しい冬を生き延び、野生化したのが北海道産馬「どさんこ」のルーツといわれている。馬体はかなり小型だが、同じ側の前脚と後ろ脚を一緒に出す側対歩なので、起伏の激しい山道でも揺れが少なく、物資の輸送や乗り物として重宝された。
明治開拓期、切り株を引き抜き、田畑を耕し、山から巨木を運び出し、石炭を掘り出すために、馬はなくてはならない存在だった。開拓が進むとより馬力の強さが求められ、海外からペルシュロン種など重種馬を輸入、積極的に品種改良が行われた。日露戦争後、日本は国策として馬匹改良に本腰を入れ、北海道から戦地に送り出した軍馬も多い。矢島あづさ-text & Illustration 北海道マガジンK A I H Pより
農林省馬政局は、「第一次馬政計画」（1906～35）を策定し、第一期1906～23年には国内馬の1/3に洋種系統を導入し大型化を図ることを、第二期1924～35年には国防と産業の双方に適した馬を造成することを目標に、馬匹改良を進めた。種牡馬検査法（1897年）、種馬統制法（1939年）の制定とともに軍の改良馬の高値買い上げを進め、馬匹改良を強力に推進していく。
- 9 馬匹改良には、良種馬の育成とともに、悪種馬の駆逐も必要とされた。大正6年（1917年）、馬匹去勢法が施行され、特別な事情がない限り明け3歳の牡馬は種牡馬を除き、全て去勢されることとなった。美唄での去勢の記録としては、大正7年及び8年の「沼貝村事務概況報告」、昭和2年、3年、6年及び7年の「美唄町事務報告」で確認することができる。その中では、和種（北海道産馬や南部産馬）は徐々に減少し、その頭数は、昭和2年に6頭、昭和3年に17頭いたが、昭和6年、7年にはいずれも0頭になり、洋種馬が一部と雑種馬がほとんどとなっている。
- 10 『美唄市史』425頁。
- 11 真駒内には明治10年（1877年）開拓使お雇い技師エドウィン・ダン（Edwin Dun 1848-1931）の設計と指導を受けて設置された「真駒内牧牛場」があった。明治15年（1882年）開拓使の廃止後、農商務省の所管とな



写真師 大島文市の肖像
『沼貝村記念写真帖』
（大正13年発行）より
美唄市郷土史料館所蔵

り、同 19 年（1886 年）北海道庁の管轄となり「真駒内種畜場」と、同 26 年に「北海道種畜場」と改称。牛の繁殖主体から馬の飼育、改良に重点が置かれていき、乗用、農耕用の種畜貸与などの事業が行われた。

日高には「新冠御料牧場」があった。明治 5 年（1872 年）に黒田開拓使次官が、小型馬を大型化し、広い用役に適応する改良の必要を認め、積雪の少ない、野草がよく繁茂している日高国の静内、新冠、沙流の 3 郡にまたがる約 7 万 ha に牧場を開設。日高の各郡に散在していた野馬 2,262 頭を集めて移牧。北海道馬産政策の拠点を目指した。明治 10 年（1877 年）エドウィン・ダンの意見と設計に基づき、近代西洋式牧場として再編整備され「新冠牧馬場」と改称する。『『蹄跡 つめあと』』（昭和 58 年 北海道馬産史編集委員会発行）、独立行政法人家畜改良センター新冠牧場 HP より。

12 馬匹改良には、畜産組合法（大正 4 年 1 月公布）に基づき設立された各地の畜産組合が地域の馬の交配などに、役割を果たした。昭和初期には乱立ぎみだった畜産組合が支庁単位に整理され、組合長は支庁長、副組合長は産業課長、各町村の支部長は町村長、支部書記は町村の産業担当課長が当たることとなり、公的色彩が濃くなる。大正 10 年 4 月には、馬籍法が公布され、馬の登録、馬体検査、売買時の記録等の措置が強化されたが、実際の取引に定着するにはさらに時間を要した。『美唄市百年史』第 2 章第 3 節 346 頁。

13 『美唄市百年史』第 3 章第 5 節 826 頁。

14 『蹄跡 つめあと』では、次のように記述されている（419 頁）。

空知地方の競馬は古い歴史をもち、各地とも祭典の余興として開催するのを恒例としていた。岩見沢は（中略）明治 23 年 5 月に同好の士が競馬山（現在の鳩ヶ丘）に土地 3 町 3 反歩を借り、翌 24 年 9 月 15 日、祭典奉走を開催して岩見沢競馬の第 1 歩を刻んだといわれる。

空知管内で岩見沢のほかに代表的なものを挙げると深川、栗沢、美唄、長沼、三笠地方で、それぞれ専用競馬場を仮設、いずれも年中行事の 1 つとして競馬を行ってきており、逐年盛況をきわめた。明治 41 年、競馬規程が公布され北海道庁長官の認可を要することとなったので、以後は岩見沢、栗沢、美唄、深川の 4 カ所に限定し、大正 12 年以降、本格的に施行してきたが、さらに昭和 2 年、地方競馬規則の公布に伴い、開催の場所は支庁管内 1 カ所と決められたので、結局最も設備がよく、地理的にも観覧的にも便利な岩見沢 1 カ所が残り、規則通り馬場（1,200m、幅員 20m）および建築物の改造、施設内容の充実を図り、毎年同場で春秋 2 回開催してきた。

本稿で紹介する美唄市行政資料室の収蔵資料

- ・『美唄市史』 昭和 45 年発行
- ・『美唄市百年史』 平成 3 年発行
- ・『改定増補 歴史写真集 屯田兵』 平成元年 北海道屯田倶楽部発行
- ・『蹄跡 つめあと』 昭和 58 年 北海道馬産史編集委員会発行